

「10の姿」を育む領域「言葉」の在り方

How to use “language” to develop the “10 figures”

望 月 真

MOCHIZUKI Shin

キーワード：保育指導法「言葉」・紙芝居・ペープサート・領域「言葉」・

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

はじめに

平成29年3月に告示された「幼稚園教育要領」では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が示された。この姿は「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」で構成され5領域のねらい及び内容に基づく活動の中で育まれるものであり、幼稚園修了時までに育みたい姿である。保育環境下での保育活動の総じた結果として「10の姿」が醸成されるものと考えられることもできるが、「10の姿」の中のいくつかを意図した保育活動によって育むこともできるのではないかと考えた。ここでは、領域「言葉」の観点から育むことができる「10の姿」について実践を図ることとした。

1 実践の概要

本実践は、子ども発達教育学科の3年生前期に履修する保育指導法「言葉」において行われたものである。本授業では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を念頭に各グループでねらいとする姿を明確にして紙芝居またはペープサートの創作活動を行った。完成した作品は幼稚園を訪問し、実演して様子を動画記録にして検証した。

指導計画では以下の通りである。

- (1) 「10の姿」の中からいずれかを意図とした作品（お話）を創作する。
- (2) (1)の作品に基づいた紙芝居を制作する。
- (3) 制作した紙芝居を幼稚園児の前で交流する。
- (4) (3)の様子を記録した動画を視聴し制作の意図を検証する。
- (5) 検証結果をもとにして、新たに「10の姿」の中からいずれかを意図とした作品（お話）を創作する。
- (6) (5)の作品に基づいたペープサートを制作する。
- (7) 制作したペープサートを幼稚園児の前で交流する。
- (8) (7)の様子を記録した動画を視聴し学修のまとめとする。

本来ならこの(1)～(8)の指導計画によって学修が進められる予定であったが、コロナ禍の影響を受けて(1)～(4)及び(8)の実施とし、紙芝居とペープサートは班ごとに選択することになった。

2 実践の実際

実践の実際については、紙芝居を選択した班とペープサートを選択した班をそれぞれ1班ずつピックアップして検証することとする。

(1) 紙芝居の実際

紙芝居の例として、「くまくんのおつかい」(5班)を挙げる。

台本は次の通りである。

○付数字は場面番号，下線部はそれぞれ②自立心，⑤社会生活との関わり，⑧数量・図形，文字等への関心・感覚を示している。

わくわく森に仲の良いくまの親子が住んでいました。

くまくんは，ちょっぴりわすれんぼう。

あれれ？ お母さんは，くまくんにお願いごとがあるようです。

①「くまくん，ちょっとたのみたいんだけど…おつかいに行ってきたくない？」とお母さんが言いました。

「えー，いやだあ」くまくんは困った顔をして言いました。

「困ったわねえー，今日のおやつはホットケーキにしようと思ったんだけど……材料が足りないのよ……。お母さんは赤ちゃんの面倒みないといけないから，どうしようかしら……。これじゃホットケーキ作れないわ……。」

「ええっ?! ホットケーキ?! 食べたい食べたい! ほく，買いに行ってくるよ!」

—《考察1》—

「ほく，買いに行ってくるよ!」という台詞で「自立心」を育むことをねらいとした。この場面では，母親がホットケーキを作ってくれるというシチュエーションのもとでの台詞だが，自立心がこれから芽生える幼児にはこうした場の設定は必要である。

くまくんは，目をキラキラさせて言いました。

②「まずは，牛乳屋さんで牛乳一本買って，その次ににわとりおじさんのお店に行って卵をひとつかご買ってきて。最後に，はちみつ屋さんではちみつをひとつ買ってきてね!」

—《考察2》—

ここでは量・図形の関心・感覚をねらいとした。牛乳1本，卵1かご，はちみつを1つ，とそれぞれ単位が異なることも評価したい。ここでは紙芝居なので描画表現で理解を図ることができるが，台詞が描画が提示される前か後かによっても理解に差異が生じると考えられる。

くまくんは，やる気満々です。

③「じゃあ，行ってらっしゃい! 道に迷わないように気を付けてね。」

「まかせて! 行ってきまーす! さーて，最初は牛乳だ!」

くまくんは，牛乳屋さんに向かいます。

④ぐねぐね道を歩いていくと，牛乳屋さんが見えてきました。

「こんにちはー!」

「へい，いらっしゃい! おいしい牛乳がいっぱいだよ! お! くまくん，一人でおつかいかい? えらいねえ。」

「うん，今日はお母さんにホットケーキを作ってもらうんだ。」

「それで牛乳を買いに来たんだね。」

「うん! 牛乳1本ください。」

「はい、どうぞ！重いから気をつけてね。」

「ありがとう！大事に持って帰るね！よーし、後は、卵とはちみつだ！」

くまくんは牛乳を買うと、にわとりおじさんのお店に向かいます。

どんどん歩いていくと…。

⑤にわとりおじさんのお店に着きました。

「こんにちは～！」

「へい、いらっしゃい！立派な卵が沢山あるよ！お、くまくんじゃないか！一人でおつかいかい？えらいねえ。」

「うん、今日はお母さんにホットケーキを作ってもらうんだ。」

「それで卵を買いに来たんだね。」

「うん！卵をひとつかください！」

「はい、どうぞ！割れないように気をつけてね！」

「ありがとう！大事に持って帰るね！」

くまくんは卵を買うと、最後の買い物に向かいます。

⑥「あれれ、最後、何を買うんだったけ？牛乳と、卵と、……あれ？」

くまくんは、何を買うのか忘れてしまったようです。

「みんなー、最後に何を買うんだったかほくに教えて！」

(子どもたちに問いかける、「せーの」で言ってもらう)

「そうだ、はちみつだ！みんな、ありがとう！」(言いながらめくる)

⑦みんなのおかげで、くまくんは買う物を思い出せたようです。

「よーし、はちみつを買いに行こう！お使いもあと少しだ！」

くまくんは元気よくはちみつ屋さんへ向かいます。

ところが……(めくる)

⑧「あれ、これはどの道を通ればいいんだろう？お母さんと来た時どの道通ったっけ……？」

あっちかなあ？こっちかなあ？わからないなあ、どうしよう……くまったくまったくま！」

くまくんは、道に迷ってしまいました。

くまくんが困っていたその時！(めくる)

⑨「やあ！くまくん！どうしたんだい？」

くまくんのもとに、はちさんがやって来ました。

「はちみつを買いに行きたいんだけど、道が分からなくて困っているんだ……えーんえーん」

くまくんは、とうとう泣き出してしまいました。

「あー！はちみつかい??ほくんちははちみつ屋さんだよ！丁度今帰るところだから、ほくについておいでよ！」

「ほんとに!?ありがとう！」

—《考察3》—

考察1からここまでの下線部の6カ所においては、「社会生活とのかかわり」をねらいとしている。社会とのかかわりは園生活を第一歩として、住居と起点として広がりを見せる。おつかいは社会生活を営む上で欠くことができないものである。そこでのはじめとして挨拶、お礼を登場人物に言わせてかかわりの持ち方を示している。

⑩歩いて行くと、あっという間にはちみつ屋さんに着きました。

「着いたよ！ ここがほくのお店さ！」

「案内してくれてありがとう！ 助かったよ！ わあ！ 美味しそうなはちみつがたくさん！」

「どれも甘くてとっても美味しいよ！」

「じゃあ、このはちみつ1つください。」

「はい、どうぞ！ 気をつけて帰るんだよ！」

「うん！ ありがとう！」

くまくんは、無事にたのまれたものを全部買うことができました。

あとは家に帰るだけです。

「全部1人で買えたぞ！」とくまくんは満足そうに家に向かって歩いていると、（だんだんめくり始める）だんだんお母さんの姿が見えてきました。

⑪「おかえりなさいーい！ 1人でよくがんばったね！」とお母さんはくまくんをたくさんほめました。

「ただいまー！ 全部1人で買えたよ！」とくまくんはうれしそうに言いました。

—《考察4》—

考察1の「ほく、買いに行ってくるよ！」から場面の展開を経て「全部1人で買えたよ！」の終末に至るまで、このお話は「自立心」を中心として展開されていたことが分かる。自立の捉えを《自分でできること》から《自分で社会とかかわりをもてること》に変えてストーリーを構成した。この構成においておつかいの経験がある園児は自分の経験と重ね合わせ、これからおつかいを経験する園児は追体験するであろう。



「それじゃあ、さっそく買ってきてくれた材料でホットケーキを焼きましょうか！」

くまくんとお母さんは家に入って、ホットケーキを作り始めました。

⑫「わあー！ おいしそうー！」

大きな大きなホットケーキが出来上がりました。

「くまくんのおかげで、美味しいホットケーキが出来上がったわよ、さあ召し上がれ！」

くまくんがホットケーキを大きなお口でひと口食べました。

「甘くてとーっても美味しい！」

良かったね、くまくん。

おしまい。

(2) ペープサートの実際

ペープサートの例として、「おてがみきたよ」（3班）を挙げる。

台本は次の通りである。

○付数字は場面番号、下線部はそれぞれ⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現を示している。

①ある日、猫のにゃんたは大好きなみきちゃんに手紙を書くことにしました。

「みきちゃんへ。この前は遊んでくれてありがとう。すごく楽しかったよ。今度ぼくの家でパーティするから、よかったらみきちゃんも来ない？ にゃんたより」

—《考察1》—

ここでは「言葉による伝え合い」を手紙によって行うことにした。話し言葉による伝え合いでは会話で終わってしまうが、手紙だと書いた人の思い、投函後の時間経過による心情の変化、返事を受け取った時の喜びなど伝え合いによる多彩な効果が期待できる。

【場面を変える（ポスト）】【1人はにゃんた（笑顔）、もう1人は手紙を持ち、手紙はポストに入れる】【手紙は取り出しておく】

②にゃんたはスキップしながら、ポストに手紙を出しに行きました。

「早く、お返事来ないかな〜？」

と言いながらお家に帰って行きました。

【場面を変える（家）】

③家に帰ったにゃんたは、お絵かきをして遊んでいたけれど、みきちゃんからのお手紙が気になって遊びに集中できません。

「まだかな〜、まだかな〜。」

いくら待っても手紙の返事は来ません。

【怒ったにゃんたに交換】

④にゃんたはだんだん腹が立ってきて、プンプンしてイライラし始めました。

「なんで返事くれないの？」と言ったその時です。外から車の音が聞こえてきました。

【家のポストに出す】【ニコニコにゃんたに交換】

⑤「あっ！郵便屋さんの車かもしれない！」と喜び、わくわくしながらポストの中を見に行きました。でも、ポストには何も入っていませんでした。

【ポストを戻す】【泣き顔にゃんたに交換】

⑥しょんぼりしたにゃんたは、ベッドの上で泣き始めました。

「なんでお手紙来ないんだろう。にゃーん！」

—《考察2》—

ここでは、「豊かな感性と表現」をねらいとしている。ここで用いられた「まだかな〜」、「プンプン」、「イライラ」、「わくわく」、「しょんぼり」等の言葉は心の在り方を表す言葉であり、園児たちがすでの用いることのできる言葉でもある。鑑賞していた園児の多くは登場人物に自分自身を重ね合わせて同化していたものと考えられる。

【窓を夜に交換】【眠るにゃんたに交換】【にゃんたをベッドに入れる】

⑦そのあともいっぱい泣いて疲れたにゃんたは、夜になってぐっすり寝てしまいました。

【窓を朝にもどす】

⑧次の日の朝、にゃんたは「ポトン」というポストに手紙が落ちる音で起きました。

【ポストを出す】【ニコニコにゃんたに交換】【手紙を出す】



⑨急いでポストを見に行きました。すると!! ポストの中にみきちゃんから1枚のお手紙が入っていました。お家の中に入ってお手紙を開けると「にゃんたくんへ。お手紙ありがとう。私も楽しかったよ! 明日のパーティー楽しみにしているね! みき特製のアップルパイを作っていくね! みきより」にゃんたはこの手紙を読んで大喜び!! 嬉しくなっ
たにゃんたは、明日作る料理を考えました。

《考察3》

ここでも「豊かな感性と表現」をねらいとしているが、返事が来るまでの時間の経過による心情の変化を追体験させている。返事が来ない間の心情の落ち込みを経て、返事を受け取った時の喜びの大きさを表現することを目指したものである。返事の内容も期待に応えようとする意欲を喚起するものである。こうした心情の変化を具体化する手法としてペープサートは有効であると考えられる。

【みきちゃんとアップルパイを出す】

⑪みきちゃんがやって来ました。みきちゃんにとってはとっても大きなアップルパイを持っていました。「うわあ! とっても大きなアップルパイ!!」

とにゃんたは言いました。

みきちゃんは、

「がんばって作ったの! とってもおいしいと思うから一緒に食べよう!」

と言って、机に置きました。

【みきちゃんを机に入れる】【アップルパイを机に置く】【魚とピザを出す】

⑫机には、大きなアップルパイに魚の塩焼きにピザ! おいしそうなお飯がいっぱい並んでいます。ごちそうを食べながらみきちゃんと言いました。

「にゃんたくんがお手紙くれたから、こんなにとってもすてきなパーティーが出来たのよ。ありがとう!」

にゃんたが書いたお手紙が、2人にとってはとても幸せな気持ちにしました。

めでたしめでたし。

3 実践の省察

(1) 紙芝居の場合

紙芝居の場合、制作した紙芝居の枚数と場面の数が一致することになる。本実践においては、各場面で登場人物の発話があり、その状況を補うものとして絵画表現を用いることになった。場面場面で描かれる色調が登場人物の心情を仄かに暗示することになり、登場人物の心情理解につながったと考えられる。また場面間の設定を時間経過を含むものとするにより、鑑賞者である園児の想像力を育むことに有効である。園児は動画を主流とするメディアに囲まれて生活しており、多くの動画が30～60コマ/秒のフレームレートで映像を流し続けている。そうした中で紙芝居は限られた場面で表現することになり、場面と場面を繋ぐ映像は鑑賞者の想像によって描かれることになる。こうした想像力を育むことに紙芝居は有効であると考えられる。

(2) ペープサートの場合

紙芝居に限られた場面数で展開することに比べて、ペープサートは背景は固定されるものの登場人物を操作によって動かすことができる。台詞による心情表現に加えてペープサートを操作することによって心情表現を補完することができる。また登場人物間の会話も互いの動きをマッチングさせることによってその会話の基盤となる雰囲気表現することも可能である。一方、会話が続く場合にはペープサートの表情を途中で変えることが困難であることから裏表で2つの表情を作ったり、途中でペープサートを取り替えたりする必要がある場合もある。台詞の音声化による表現のみならずペープサートの操作の検討、練習といった相当な準備時間を必要とすることが明らかとなった。

4 まとめと今後の課題

コロナ禍という未曾有の状況下での実践となった。創作活動を含む学修内容は遠隔授業では進めようがなく、対面授業での限られた時間内での実践となった。多くの学生は持ち帰りの制作となり、最も時間をかけるべき実演の練習も限られたものになった。こうした経緯もあり、完成度の低い作品となったが実演の場では園児たちは熱心に鑑賞してくれた。学生に対する園児たちなりのエールでもあったのかもしれない。

創作される作品には、作者の意図が組み込まれるものである。今回は「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を念頭に制作を進めた。複数のグループが②自立心、⑤社会生活との関わり、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現をねらいとして取り組むことができた。これらのねらいは即効性があるものではなく、園児の中に蓄積されていくべきものであろう。

今後の課題としては、ICT機器が保育現場にも導入されることもふまえ、ICT機器を用いた映像作品の制作も検討する必要があると考えられる。その際、従来の児童文化財として紙芝居、ペープサートと映像作品との比較を十分に行い、双方のメリットを取り入れていく必要があると考える。時代の推移に照らして保育現場も不易と流行の波に揺られながら少しずつ変化していくものと考えられる。

《参考文献》

- ・ 幼稚園教育要領（平成29年告示） 文部科学省
- ・ 保育所保育指針（平成29年告示） 厚生労働省
- ・ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示） 内閣府・文部科学省・厚生労働省
- ・ 矢田貝公昭 『言葉』 一藝社 2014年
- ・ 右手和子 西山三郎 若林一郎 『紙芝居をつくる』 大月書店 1990年
- ・ 吉田ちかこ 『しかけペープサート』 誠文堂新光社 2011年
- ・ 秦野悦子 『ことばの発達入門』 大修館書店 2001年
- ・ 岡本夏木 『幼児期』 岩波新書 2005年
- ・ 岡本夏木 『子どもと言葉』 岩波新書 1982年
- ・ 齋木恭子 『児童文化財の活用を考える』 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第76号 pp.31-40 2018年